

青森県の観光地に関する地理学的考察 — 十和田国立公園を例として —

芳 賀 節 夫

I 序 論

一般に観光ブームといわれる如く、今日ほど多くの人々が自然を求めている事はない。この事は国民の所得水準の向上や、余暇の増大などが原因していると思われるが、高度に機械化され、専門化された現代社会の錯綜の中で、自然へとかりたてている社会必理的欲求も見落す事はできない。

青森県は全県的に観光資源は豊富であり、観光開発は地元民の大きな期待を担っている。観光地の実態を適確に把握する事は、適切な観光開発（地元開発）を生むものであるが、観光地に関する研究がなされるようになったのはごく最近の事であって、十和田国立公園についての研究も不十分である。

かかる意識のもとに筆者は十和田国立公園をとりあげ、観光客の動態を中心に、3つのピークについてその分析を試み、分析によって把握された実態をより科学的な立場からみる為に、北海道、東北、関東の3地方を本地域の観光客ブールと想定し、その立場での本地域の観光地としての位置、性格を明らかにしたいと思う。分析の方法として、(1)観光客の出発地、(2)年令的階層、(3)利用ルート、(4)利用交通機関、の4点を総合したものを視点とした。

II 本 論

1. 観光客の概観

昭和37年から41年に至る5年間の青森県内主要観光地の観光客数はオ1表のごとくであり、十和田国立公園は全体の4分の1程度を引きつけている青森県オ1の観光地である。オ1図は十和田国立公園における同年代の月別観光客数を貸切バス、定期バス利用の角度から図化したものであるが、10月と8月の2季をピークとする2季M型観光地である事が明瞭にうかがわれ、このようなタイプの観光地は東北地方においては一般的である。

オ2図はこれら観光客の入園ルートを比率で示したものであるが、青森口ルートが断然多く利用されており、全体の半数近くがこのルート利用によって入り込んでいる。次には道路開発の最も早く、国道103号線としての待遇を受けている南口ルートが20%台で続き、三沢口ルートも含めて上位3ルートはいずれも国鉄駅と連絡しており、鉄道をオ1とする今日の旅行形態からして上記3ルートの利用率が高いのは当然である。

次にこれら観光客の出発地について概要をのべるためにオ2表、オ3表、オ4表を示した。

才1表 年別主要観光客入り込み数の推移

(単位 千人 青森県調)

観光地	年度	37	38	39	40	41
十和田(国立公園)		980	1041	1127	1167	1127
下北半島(国定公園)		179	196	219	371	508
浅虫・夏泊(県立公園)		1225	1243	1265	1272	508
深浦・十二湖(〃)		200	258	347	388	397
大鰐・碓ヶ関(〃)		895	970	1060	952	734
種差海岸(〃)		211	192	219	371	508
龍飛ほろ月(〃)		79	106	120	207	56
名久井岳(〃)		160	160	230	272	440
屏風山・権現崎(〃)		398	468	478	483	650
黒石温泉郷(〃)		320	369	380	409	400
岩木山(〃)		264	319	334	381	544
計		4921	5321	5773	6184	5636

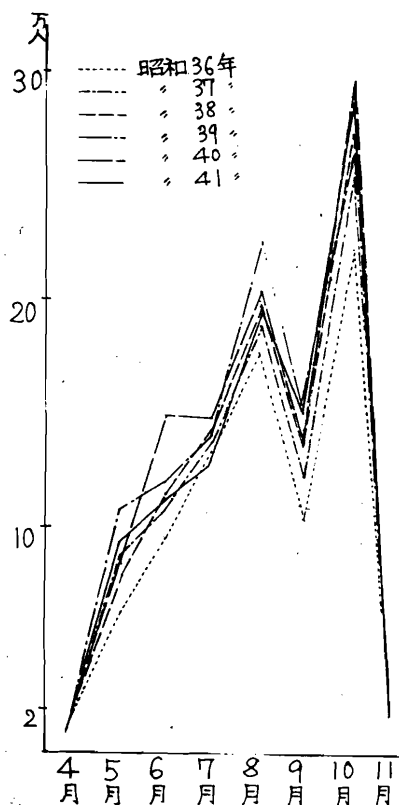
表面的な数字として現れない地元一般観光客や、その他の条件を考慮して本地域の勢力圏について考察すると、全国から入り込んではいるものの、北海道、東北、関東地方のいわゆる東北日本からの入込みは全体の4分の3程度を占めていると考えられ、これら3地方を観光客ブールと設定した理由もここにある。

2. 観光客の分析

(1) 10月のピーク

この時期には日に7,000台にも及ぶバス、乗用車が殺到し、様々の地方から、あらゆる階層の人を運び込んでおり、明確な実態分析は非常に困難である。

才1図から10月の観光客入り込みは年々増加の傾向にある事がわかるが、貸切バス、定期バスによる入り込みが絶対数において卓越している(才3図)。乗用車・その他の交通機関による入り込みも見落せないが、貸切バス利用は即ち団体客を意味するものであり、1日平均110~120台の貸切バスが17万人の観光客を運んでおり、



才1図 月別入り込み観光客数の推移
(定期・貸切バスのみ)

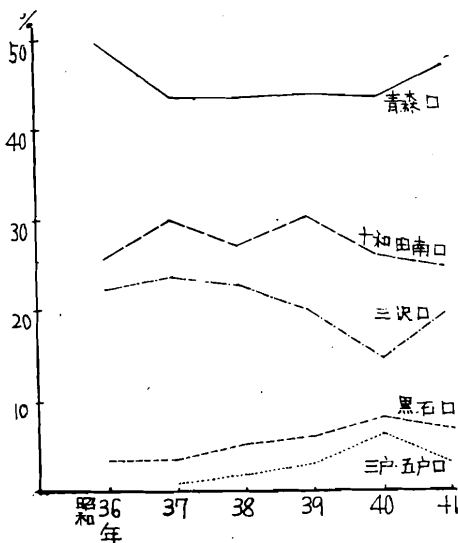
こうした団体客の半数以上は北ルートを利用している（オ5表）。こうした観光客の出発地年齢階層をみる為にオ3表、オ4表を示したが、一般団体がその主力であり、全国一円から入り込んでいる事がわかる。一般団体の出発地内訳についてはさらに、関東地方からのそれは青森県を含めた東北地方とほぼ同程度の割合であり、農協団体、会社団体とは別に、本地域の紅葉探索を目的とした「観光団」組織のものが注目される。

学生団体の主力は高校生、大学生などであり、東京、名古屋、大阪などの大都市がその出発地となっている。

時間につきまとわれた旅行が一般化してしまった現在において、目的地までの距離と費用が旅行を促す附随的条件であるが、10月のピークに限っては、本地域のもつ観光資源は全国を市場と設定するに足る要素を持っており、個性ある観光地としての発展が期待される。しかし反面交通渋滞、宿泊施設の不足など観光行政的な問題点も提起されよう。

(2) 8月のピーク

オ3図から8月に訪れる観光客は10月とは逆に定期バス利用がその主体であり、貸切バスよりも倍以上の観光客を運んでいる。以下先のオ3表、オ4表にオ6表を加えてさらに考察すると、定期バス利用者はシーズン中最高で13万人にも上っており、貸切バスの利用率は観光シーズンにも拘らず極端に低い。定期バス利用者、即ち一般観光客は少人数構成がその主体をなし、本地域の湖や高原などサマーリゾート的



オ2図 人口ルート別入込数割合の推移

資源を対象とし、キャンプ、ハイキングなどレジャー的色彩を帯びたタイプと、複数の観光地の周遊を目的とし、その一過程として本地域へ入り込むタイプに分けられるが、共通するものはこれらの主体は休みを利用した学生など青年層観光客である事であり、前者は青森、秋田など近隣県、後者は関東、関西など遠方からの出発者である。

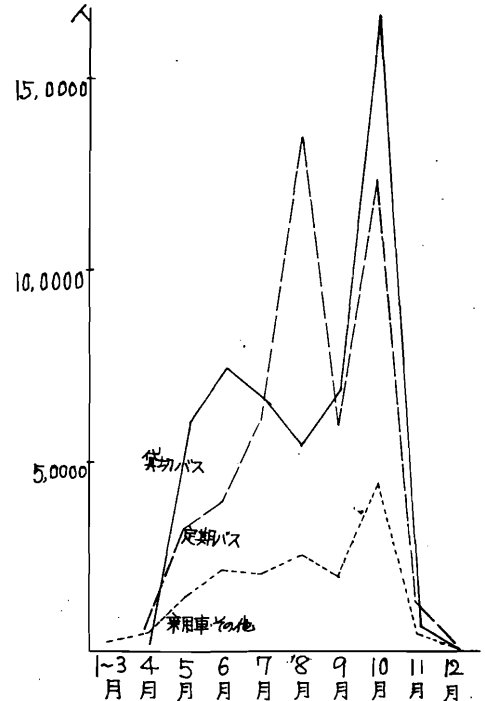
団体客出発地についてみると、特定地域に集中する事なく、平均して入り込んでいる事が特徴であるが、特に東北三大祭りや銘うった、広域観光PRの影響で本地域への来訪をみるケースは注意される。例えばオ3表、東京発626人の中には、上記観光団430人が含まれている。

(3) 5・6月のピーク

この時期での入り込み観光客数は年々漸増しその伸び率も他時期に比べ高いが、10月同様貸切バス利用による入り込みの多いのが特徴である。

オ4表をみると5・6月とも一般客よりも団体客の比率が高く、各々55%、63%となっており、この様な傾向は他時期にはみられない。団体客の内訳については学生団体率が各々78%、66%であり北海道が主に出発地となっている。この理由としては位置的に修学旅行コースに入る事、学校側の事情により交通の緩和されるこの時期を選ぶ事などがあげられようが、教育観光地弘前市を目的地の一つとする関係で日程上都合がよい、事も見落せない。

一般団体観光客については概して北海道、東北地方からの入り込みが卓越している。



オ3図 月別利用機関別観光客数 (昭和41年度)

オ2表 東北地方主要観光地出発地別入り込み数

(昭和37年度) 単位 千人

観光地 地方名	磐梯吾妻	蔵王	松島	陸中海岸	平泉	八幡平	十和田
北海道	33 (1.3)	13 (1.8)	127 (6.4)	1	39 (9.2)	5 (2.0)	71 (6.3)
東北	990 (39.1)	790 (66.4)	1110 (56.1)	330 (80.5)	230 (54.8)	180 (7.20)	720 (64.9)
関東	1284 (50.8)	325 (27.4)	634 (32.0)	61 (14.9)	71 (16.9)	49 (19.6)	228 (20.4)
中部	91 (3.5)	12 (0.9)	42 (2.1)	11 (2.6)	36 (8.5)	7 (2.8)	35 (3.1)
近畿	65 (2.5)	41 (3.4)	56 (2.8)	7 (1.7)	35 (8.3)	9 (3.6)	30 (2.7)
中国	17 (0.6)	4 (0.3)	1		5 (1.1)		14 (1.2)
四国・九州	50 (1.9)	5 (0.3)	10 (0.5)		4 (0.9)		12 (1.0)
計	2530 (100.0)	1190 (100.0)	1980 (100.0)	410 (100.0)	420 (100.0)	250 (100.0)	1110 (100.0)

国鉄営業局開発部「観光地別入込観光客数調査資料」昭39年

才3表 月別発地別国鉄バス団体客利用数 (昭和43年度)
国鉄バス青森営業所調

発地名	4	5	6	7	8	9	10	計	比率
北海道	50 (0)	700 (613)	718 (177)	261 (0)	307 (0)	108 (0)	230 (58)	2374 (848)	% 57
青森		100 (0)	937 (0)	573 (0)	861 (133)	1458 (200)	745 (200)	4674 (533)	12.0
東北		2032 (1847)	2906 (2153)	1258 (329)	372 (87)	678 (0)	5102 (499)	12348 (4911)	30.2
東京		108 (51)	36 (0)	235 (64)	626 (199)	122 (71)	1553 (50)	1386 (432)	3.3
関東		80 (26)	333 (0)	162 (0)	137 (27)	703 (0)	2993 (92)	5689 (145)	14.0
北・中・近			1694 (213)	4597 (2603)	1057 (670)	2123 (1023)	763 (0)	10234 (4508)	25.6
中・四・九	50 (0)	75 (0)	386 (33)	1096 (323)	878 (358)	1057 (1029)	723 (323)	4215 (2068)	10.2
計	100 (0)	3095 (2537)	7010 (2579)	8632 (3319)	3360 (1471)	6249 (2323)	6907 (1220)		

()内は学生団体を示す。

才4表 月別出発地別遊覧船利用数 (昭和42年度)

(青森観光事業協会)

出発地	4	5	6	7	8	9	10	11	計	合計	比率
北海道	265 140	505 6200	784 11213	951 458	1638 28	1765 190	1872 377	0 0	7780 18606	26386	% 17.1
青森	134 0	997 1465	2236 1441	2197 1450	1847 914	1554 1140	7189 2413	106 0	16260 8823	25083	16.1
東北	32 0	1062 410	2738 978	3233 555	3599 132	4941 1089	12954 842	214 0	28783 4006	32779	21.2
関東	226 0	888 5308	1229 1218	1152 754	3566 543	1301 1095	18812 4587	479 101	27653 13606	41259	26.7
北陸・中部 近畿	114 209	411 1887	1846 1047	623 1196	412 309	814 1116	6918 1511	138 0	13242 8147	21389	13.8
中国・四国 九州	0 0	436 45	394 832	623 1196	412 309	1049 1659	772 0	0 0	3679 4091	7770	5.0
外国	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	31 0	0 0	0 0	31 0	31	0.1
計	771 349	4299 15365	9227 16729	10158 5672	12061 3044	11448 6289	48517 9730	937 101	97418 57279	154697	100.0
団体外員	2394	15947	15417	31482	78151	22709	82983	4110	253193	253193	
合計	3514	35611	41373	47312	93256	40446	141230	5148	407890	407890	

上段は一般団体数，下段は学生団体数を示す。

オ 5 表 月別入口ルート別貸切バス利用者数 (昭和 41 年度)

青森県

月 入口ルート	4	5	6	7	8	9	10	11	計
青 森 口	1,129	34795	40753	31,679	23797	30444	86287	2937	252,003
三 沢 口	1,073	4718	7719	8428	13,035	16865	31,644	2258	86,638
黒 石 口	206	7940	6797	3571	3606	4032	9358	829	36,319
十和田南口	277	11,805	17,185	17,494	11,085	15,774	33,042	727	107,389
三戸・五戸口	42	742	1,671	5820	2382	2485	6836	172	20,150
計	2727	60,000	74,123	66,992	54,087	69,600	167,147	6,923	501,599

オ 6 表 月別入口ルート別定期バス利用者数 (昭和 41 年度)

青森県

月 入口ルート	4	5	6	7	8	9	10	11	計
青 森 口	3521	11,008	13,125	23,615	52,241	26,063	53,302	3342	186,217
三 沢 口	1,602	8429	15,217	17,520	25,487	13,198	21,024	4502	106,982
黒 石 口	1226	2299	2116	2704	7414	2216	4232	411	22,618
十和田南口	658	9895	8276	16,325	48,248	17,025	42,636	2880	146,939
三戸・五戸口	35	681	776	779	1,560	1,040	1,703	306	6,880
計	7,042	32,312	39,506	60,943	134,950	59,542	123,897	11,444	469,636

3. 本地域の観光地的位置

観光形態のクラスレジャーからマスレジャーへ、点・線主体から円・帯の広域観光へと変化しつつある現在の動きの中で本地域はどのような位置にある観光地であろうか？ 以下本地域の大きな観光客プールである北海道、東北、関東3地方からみた観光的位置について述べる。

(1) 東北地方

東北地方は広い意味で地元であり、本地域への入り込み観光客数の半数以上を占めている。本地域と類似した資源をもつ観光地は東北内でも他に例を上げる事は出来るが、神秘性、原始性を売りものとするみちのくの観光地は多少ニュアンスを異にしてはいるものの、北奥羽三県特に青森県からの入り込みが多い事、裏を返せば東北地方南部から誘致を決定づけられないのは、位置的に東北地方は日本北部にある為、々南への観光地への憧憬が強いからである。又団体客を例にしてみると農業を産業基盤とする本地域からの入り込みは、学生、会社などは別として農作業とのかね合いから生れた余暇を農協、その他の組織を通じて実現されるが、本来の観光の他に娯乐的、親睦的色彩の強い、あすの労働力の再生産を期するレクリエーション的要素の強い観光地ともいえよう。

オ7表 認識調査結果（最も行きたい観光地は？）

%

項 目	年代 性別	10代		20代		30代		40代		50代以上		計		総 計
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
下北半島		12.3	7.7	8.3	7.5	3.8	6.3	13.3	3.9	9.2	0	9.2	6.3	7.8
津軽		4.1	6.2	3.1	3.8	2.5	3.8	6.7	1.3	6.7	0	4.0	4.0	4.0
十和田		45.1	38.9	26.2	43.6	36.3	32.5	26.7	40.8	26.2	34.1	31.8	39.0	35.4
青森市		3.3	1.0	0.9	0.8	1.3	1.3	0	0	0	0	1.3	0.8	1.1
八幡平		0.8	1.6	5.7	2.3	1.3	1.3	3.3	1.3	3.1	2.4	3.4	1.7	2.6
浅虫		0	0.5	0.9	0	3.8	2.5	0	1.3	6.2	9.8	1.6	1.5	1.6
大鰐温泉		0.8	0	0.4	0	0	0	0	1.3	1.5	0	1.5	0.2	0.4
陸中海岸		5.0	3.1	3.5	5.3	3.8	2.5	10.0	2.6	6.2	0	4.9	3.3	4.1
平泉		0.8	4.7	5.7	3.0	2.5	0	0	1.7	3.9	1.5	9.8	3.2	3.5
花巻温泉		0.8	0.5	1.3	0.8	1.3	3.8	0	0	4.6	2.4	1.4	1.1	1.3
男鹿半島		3.3	4.1	3.9	2.3	0	3.8	6.7	1.3	0	0	3.1	2.9	3.0
秋田市		0	0	0.4	0.8	1.3	0	1.7	0	0	0	0.5	0.2	0.4
田沢湖		1.6	2.1	0.9	0.8	1.3	0	0	0	0	0	0.8	1.0	0.9
松島		4.1	6.7	3.1	3.8	10.0	8.8	3.5	14.5	6.2	0	4.7	6.9	5.8
山羽三山		0	0	1.3	0	0	0	0	1.3	1.5	0	0.7	0.2	0.5
蔵王		2.5	4.1	3.9	2.3	6.3	2.5	6.7	1.3	1.5	0	4.0	2.7	3.4
磐梯吾妻		1.6	3.1	3.1	2.3	2.5	0	1.7	3.9	0	0	2.2	2.3	2.3
会津若松		0	1.0	1.4	2.0	1.3	7.5	3.3	2.6	1.5	2.4	0.8	2.9	1.9
磐梯朝日		2.5	3.6	3.1	3.0	6.3	2.5	1.7	1.3	4.6	9.8	3.4	3.4	3.4
国立公園														
飯坂温泉		0.8	0	0.9	0	0	1.3	3.3	3.9	1.5	2.4	1.0	1.1	1.1
猫苗代湖		1.6	1.6	1.7	0	2.5	1.3	0	0	0	0	1.4	0.8	1.1
庄内三温泉		0	0	0	0	0	0	1.7	3.9	0	17.1	0.2	1.9	1.1
その他		0	1.0	0	0	0	0	1.7	0	0	0	0.2	0.4	0.3
無効		9.0	8.3	21.4	15.0	12.5	18.8	6.7	9.2	18.5	9.8	15.5	11.9	13.7

(2) 関東地方

オ7表（昭和40年，東京において明治大学観光事業研究部が東北地方の観光地についての認識調査を実施した中の一割抜粋，対象1000名）にみる如く，東京在住者にとって本地域は東北地方の中で最も旅行希望の多い観光地であり，磐梯吾妻など一泊二日行程圏内にあるものは別として，なかなか訪れる機会のない観光地である事がわかる。従って時間の制約を受けない学生は別として，一般の人々は会社や所属団体などを単位とした団体（観光団も含む）を背景に入り込むケースが多い。即ち行きたいが，機会に恵まれなければ遠すぎて行けない観光地々として認識されている。

(3) 北海道地方

同地方からの入り込みにおいて特徴的である修学旅行生については，教育観光地弘前市との

結びつきにおいて実現をみるのであり、附随的色彩の濃い観光地といえよう。

支笏・洞爺、阿寒国立公園など類似した資源を豊富にもつ事や、近くに位置しながら海を越えなければならないなどの点で、関東の場合程旅行熱をそそらないのも確かであり、一般団体や一般旅行者も本地域を素通りして、まっすぐに中央の目的観光地に急ぐ場合が多い。日程消化を急ぐ事もあるが、近くにありながら認識度の低い観光地としてみる事ができる。

Ⅱ 結 論

以上を要約すると

- (1) 8月、10月をピークとする2季M型観光地である。
- (2) 5・6月の来遊観光客は主に北海道の修学旅行生である。
- (3) 8月の入り込みは少人数構成の学生が主体で、「広域観光」の例をみる事ができる。
- (4) 紅葉の10月は全国から入り込み、全国を観光客ブールとするに足る資源性をもっている。
- (5) 貸切バス、定期バス利用による入り込みが主体的であり、利用ルートとしては青森口（北口）があげられる。
- (6) 観光客誘致圏は北海道、東北、関東地方であり、特に地元青森県への依存度が高い。
- (7) 北海道からみた本地域は近距離にあるにもかかわらず、認識度の低い観光地である。
- (8) 東北地方についても同じであるが、北奥羽三県との結びつきが特に多い。
- (9) 関東地方からみた場合には東北地方諸観光地の中で、最も強く旅情をそそぐ観光地である。

参 考 文 献

- (1) 武居忠雄・秋山智英 共著（1965）：観光と森林
伊藤 敬 地球出版
- (2) 岩田 考三編（1968）：観光地理研究
明 玄 書 房
- (3) 明治大学観光事業研究部編（1968）：白雲—観光事業と地域経済—